

# インディアニズモ ( Indianismo )

ブラジルの先住民インディオを題材とし、文学の中でその姿を理想化しながら、ナショナリズムの思想と結びついた、インディオ称揚主義。

インディオに関する最初の記述は、1500年、ブラジルを“発見”したペドロ・アルヴァレス・カブラル ( Pedro Álvares Cabral ) 艦隊の書記官であったペロ・ヴァス・デ・カミーニャ ( Pero Vaz de Caminha ) の書簡集に見ることができる。が、それは、新しい土地についての情報や原住民の生活様式などを、本国ポルトガルに伝えることが主な目的であった。当時書かれた旅行記や航海日誌は、情報文学 ( Literatura Informativa ) と呼ばれている。

18世紀、ブラジルでは新古典主義 ( 擬古主義 ) とされる時代に、ミナス・ジェライス州出身の2人の詩人が、叙事詩のテーマとして、原住民インディオと自然景観をテーマに選んだ。

1769年にバジーリオ・ダ・ガーマ ( Basílio da Gama ) によって出版された『オ・ウラグアイ ( O Uruguai )』は、この時代の叙事詩の中で、もっとも優れた作品と考えられている。

その主題は、マドリッド条約の決定を拒むイエズス会士たちの集落であるセッチ・ポーヴォス ( Sete Povos ) に結集したインディオとイエズス会士に対抗して、ポルトガル人・スペイン人連合軍が企てた遠征である。

作品は、ポルトガルの詩人ルイス・デ・カモンイス ( Luís de Camões ) のスタイルを模倣せず、韻を踏まない10音節の自由詩で書かれている。

一方、サンタ・リッタ・ドゥラン ( Santa Rita Durão ) の『カラムルー ( Caramuru )』 ( 1781年 ) は、『オ・ウラグアイ』から12年遅れて出版された作品であるが、興味深いことに、ガーマが古典的な手法からの脱皮を試みたのに対して、ドゥランが再び伝統的なカモンイスの形式を厳格に踏襲している。

彼は人生の大部分をポルトガルで過ごしたが、イエズス会士によるインディオの教化を重視し、故郷ブラジルの自然を描写することに努め、自らの詩に土着主義の傾向があることを認めている。

こうして、インディアニズモは19世紀のロマン主義に至って、よりナショナリスティックな性格を帯びながら、詩だけでなく、小説のジャンルにおいても、その思潮は頂点に達した。

まず、詩歌の分野で光芒を放ったのは、ゴンサルヴェス・ディアス ( Gonçalves Dias ) である。

彼がインディアニスタ詩人としての地位を決定的にした詩は、『最後の詩歌集 ( Últimos Cantos )』に収められている「イ・ジュッカ・ピラーマ ( I-Juca-Pirama ) 」と『チンビーラ族 ( Os timbiras )』であろう。

ディアスの詩に登場するインディオは、中世ヨーロッパの英雄としての騎士に代わる、ブラジル人の国民的象徴としての役割を与えられたために、過度に理想化されている感は否めない。

祖国への郷愁を募らせる作者の想いが込められた詩、“我が故国に椰子の木ありて / そこに歌うはサビア一鳥 ( Minha terra tem palmeiras, / Onde canta o sabiá ; ) ” で始まる「流亡の曲 ( Canção do exílio ) 」は、つとに有名である。

ジョゼー・デ・アレンカール ( José de Alencar ) は、ゴンサルヴェス・ディアス同様、“人間は善良にして生まれ、社会が人間を腐敗させる” と考えた、ジャン・ジャック・ルソー ( 仏 ) の“善良なる野蛮人” の